いじめに適切に対応するために取り組むべき課題

資料2－2

いじめの要因や対応についての高知県の子どもや教員の声

子どもが感じているいじめの要因

些細なきっかけ コミュニケーション不足	・ちょっとしたいたずらから発展した。 ・些細な人間関係のトラブル。 ・些細な喧嘩が解消されず発展した。 ・意見のすれ違いから起こった。 ・ＳＮＳ上のトラブルから発展した。
抑止力の低下	・　受け狙いで面白半分に始めたことが徐々にエスカレートしてやめられなくなる。 ・　周りに流されて荷担してしまう。
他者受容の低さ	・　相手のことが嫌、気に入らない。 ・　自分より優れている相手への嫉妬。 ・　見た目、キャラ、話し方、行動が受け入れられない。 ・　個性の違い。

※「高知家」児童生徒会援隊より

教員が感じているいじめの早期発見対応の難しさ

アンテナの弱さ	・　子どもたちの様子について職員間の会話が少なくなっている。 ・　教員個人の問題意識のズレから生じる初期対応・組織的対応の遅れ。
発見の困難さ	・　被害者と思える児童生徒が、加害生徒をかばったり、問題意識をもっていなかったりするケースがある。 ・　いじめアンケートに正直に書くことができない児童生徒がいる。
家庭との連携の困難さ	・　子どもへの指導が通っても、それを納得できない家庭があり、話が複雑になる。 ・　初期段階で保護者（加害含む）の気持ち（本音、困り感）に寄り添った対応を行うことが重要である。

※夢いっぱいプロジェクト推進事業推進リーダー会議より

※　参考　自殺等の重大事態を発生させた学校等に見られる課題（平成30年３月総務省行政評価局　いじめ防止対策の推進に関する調査報告書より抜粋）

いじめの認知等（５６%）	・　教職員がいじめの定義を平成８年以前の「継続的、一方的、深刻」と思い込み、いじめと認識していなかった。 ・　この程度は悪ふざけやじゃれあいで問題ない、本人が「大丈夫」と言えばいじめではないという認識があった。
重大事態発生後の対応（３５%）	教委職員が法の趣旨や内容を十分把握しておらず、首長に対する重大事態の発生報告が遅れてしまった。
アンケートの活用（２７%）	アンケートに「いじめがある」と回答があった際の具体的な取り決めがなく、アンケートが活用されなかった。
学校内の情報共有（６１%）	児童生徒から担任へ相談があったにもかかわらず、担任は、いじめの問題として学校内で情報共有をしなかった。
組織的対応（６４%）	被害児童生徒への聞き取り等について、学校として対応の仕方が共有されておらず、全て担任任せであった。
教員研修（４６%）	いじめに焦点を当てた教職員の指導力向上のための研修が開催されていなかった。

※（　　）内の%は、分析に用いた67調査報告書のうち、課題があると確認できた割合

子どもが感じているいじめが起こる要因として、些細なきっかけやコミュニケーション不足によるものが多い。また、抑止力の低下や他者受容の弱さがいじめをエスカレートさせていると考えられる。

教員が感じているいじめへの早期発見・対応の難しさについて、教員のいじめへのアンテナの弱さや発見の困難さとともに、家庭との連携の難しさがある。

引き続き、子どもや教員の意見を聞き整理するとともに、今後、保護者等の意見も聞き、高知県におけるいじめ問題の要因の分析や課題の整理をさらに進め、効果的な対策について検証していく。